

近世城下町岩国の町人地設計論理に関する研究

A Study on Town Design Principles of Modern Castle Town of Iwakuni

○松下直道¹, 阿部貴弘²

*Naomichi Matsushita¹, Takahiro Abe²

Abstract: Castle towns of early modern times had a urban structure composed of unique infrastructure. However, it is not fully understood how the castle town of the modern age was designed. In this study, we will clarify the design logic of the townspeople of Iwakuni Castle Town.

1. はじめに

我が国の主要な都市の多くは、近世城下町を都市の基盤として発展してきた。ところが、こうした近世城下町がどのような論理に基づき設計されたのか、その設計論理について、十分解き明かされているとは言い難く、現状では個別の城下町を対象とした事例研究の蓄積段階にある。

そこで本研究では、未だどのような論理で設計がなされたか解き明かされていない、近世城下町岩国を対象に町人地の設計論理を解き明かすことを目的とする。

2. 研究対象地の選定について

現在、岩国市では、城下町中心部を流れる錦川に架かる錦帯橋について『錦帯橋と岩国の町割』として世界文化遺産登録を目指している。世界遺産登録に向けては、城下町の設計論理を明らかにする必要がある。

しかし、既存研究では、竹林^[1]より町屋敷数の変遷や考察が行われたものの、町人地の設計論理が解明されているとは言い難い。そこで本研究では、近世城下町岩国を研究対象地として選定した。

3. 分析視点・方法

町人地の設計論理を解明するために以下の3つの分析視点と、分析内容及び使用する資料を Table 1 に示し、分析に用いた絵図と古地図を Table 2 に示す。

Table 1. Research method

No.	分析視点	分析内容	分析資料
(1)	開発過程	町人地が拡大された際、どのようなプロセスで行われたのか読み解く。	文献資料 古文書・絵図
(2)	モジュール	街区辺や宅地の奥行から、町の設計単位を分析し、読み取り、設計の際に優先された要素を読み解く	文献資料 絵図
(3)	町割の基軸	地形図をもとに、微地形と街区構成や下水路といったインフラとの関わりから設計論理を求める。	文献資料 地形データ

Table 2. List of old maps used in study

発行年	タイトル
1668 (寛文 8) 年	御領内之図 (岩国領全図)
1761 (宝暦 11) 年	錦見町絵図
江戸後期	旧岩国城下図 (横山)
1866 (慶応 2) 年	岩国領全図 (三之中)
1867 (慶応 3) 年	岩国城下町 (錦見・今津・川西)
1935~1948 (昭和 10~昭和 23) 年頃	岩国町下水道工事平面図

4. 調査結果

(1) 開発過程

開発過程にかかわる年表を Table 3 に示す。

Table 3. Chronology of urban development in Iwakuni

年号	西暦	主な出来事
1600	慶長 5	関ヶ原の戦い
1601	慶長 6	横山の城地選定, 各城下町の町割り。錦川築堤。
1602	慶長 7	横山・錦見・川西・今津の屋敷割, 吉川広家岩国に入る
1603	慶長 8	岩国城起工
1608	慶長 13	岩国城竣工
1615	元和元	一国一城令により岩国城破却
1626	寛永 3	錦見城下町の氏神・椎尾八幡宮創建
1643 頃	寛永 20	武家屋敷街拡張 (散島 (錦見)・新小路 (錦見)・川西面田など)
1648	慶安元	町辺拡張 (川原町 (横山)・土手町 (錦見)・今津町など), 錦見新小路町割
1654	承応 3	12 月, 錦見町の大火事 (寺院 3 軒, 家中屋敷 20 軒含む 229 軒焼失)
1655	明暦元	町屋敷割一部改正 (現在の町割)
	寛文中	川西に町屋敷を新設
1673	延宝元	吉川広嘉によって錦帯橋創建
1684	貞享元	川西町拡張
1690	元禄 3	錦見の武家屋敷街拡張 (森木・新道・小道・牢小路など)
1767	明和 4	新町創設 (安永 7 年町部に登録)
1787	天明 7	錦見中横町延長, 町部となる
1853	嘉永 6	豆腐町を登富町と改称

1601 (慶長 6) 年, 城下町造営のため町割や錦川の築堤が行われ, 翌年に各城下町の屋敷割が行われた。主な城下町は武家地の横山と, 中下級武士と町人地錦見があった。1643 (寛永 20) 年から, 錦見に新小路町と横山の郭外に川原町が成立した。また, 錦見側も川沿いに土手町が成立し, 町人地の拡大が行われ始めた。城下町, 錦見の大きな転換期は, 1654 (承応 3) 年の錦見の大火後の町割で, 防火対策として横町が拡幅された^[2]。この町割が現在も続いている。

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

岩国城下町の位置関係を表した図を Figure 1 に示す。

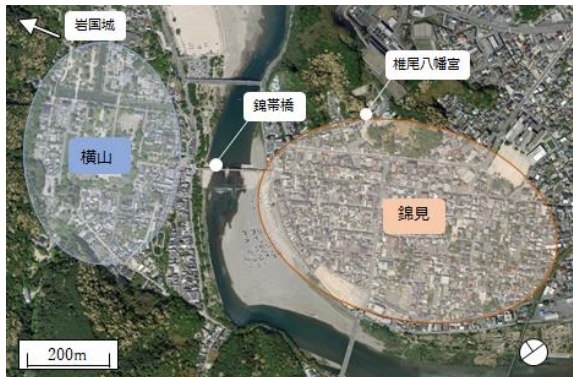


Figure 1. Topographic map of Iwakuni castle town

(2) モジュール

錦見地区のモジュールを Figure 2 に示す。(凡例は

Table 4 に記載)

Table 4. Explanatory notes of Figure 2

凡例	内容
ベース図	錦見町絵図(宝暦絵図)模写(岩国城下町 P.48 より) [1761]
青線街区	岩国城下町(錦見)(慶応絵図)模写(岩国城下町 P.32-33 より) [1867]
等高線	岩国城下町下水道工事平面図 [1935~1948 頃作成] 【単位(尺)】
街区辺長さ	錦見小路名(岩国城下町 P.30 より) ※『享保増補村記』[1726 年頃]に記載された「小路縦横丁数並地方之小名」と「町」の項を記入したもの【単位(間)】
背割線	錦見町絵図(宝暦絵図)模写(岩国城下町 P.48 より) [1761]
排水方向	緑丸…マンホール, 緑矢印…流下方向 岩国城下町下水道工事平面図 [1935~1948 頃作成]

(3) 町割の基軸

町割の基軸を明らかにするために、把握した微地形及び下水道網を Figure 2 に示す。(凡例は Table 4 に記載)

5. 考察・設計論理のまとめ

以上の分析に基づき、城下町岩国の町人地設計論理を Table 5 の通り明らかにした。

Table 5 Consideration on design logic of Iwakuni castle town

項目	考察
街路	南東方向に向けて緩やかに低くなる地形勾配に沿うように城に向かう街路を配置
	尾根筋(微高地)もしくは谷筋(微低地)に配慮しながら、およそ 30 間間隔で城に向かう街路を配置(玖珂町、柳井町、米屋町、塩町を貫く街路が最も顕著な谷筋)
	水が集まりやすい、くぼ地になっている地点を基軸に城に向かう街路と直行する街路(下横町)を配置
	下横町を中心に、両側にそれぞれおよそ 60 間間隔で中横町、上横町を配置
宅地の配置について	基本的に城に向かう街路に間口を向けて宅地を配置(両側町)
	玖珂町、柳井町、米屋町、塩町では、間口数間、奥行おおむね 15 間の宅地を割付
	材木町、魚町、豆腐町では、間口数間、奥行おおむね 11~13 間の宅地を割付。(玖珂町、柳井町、米屋町、塩町の宅地奥行や隣接する武家屋敷の奥行との取り合いで奥行が短く)
	大明小路の両側にも、奥行おおむね 15 間の武家屋敷を配置
街道について	玖珂町、柳井町、米屋町、塩町を貫く街路が錦見のメインストリートであると考えられるが、錦見では、他の城下町に見られるようなメインストリートへの街道の引き込みはない
錦帯橋について	一般的に町人地のメインストリートの軸線上もしくは近接した位置に城に通ずる橋梁を架橋するが、錦見のメインストリートは街道を引き込んでいないことから、この論理は当てはまらない 錦帯橋は、橋梁の利用者である家臣団の居住地(武家地)に近い位置(つまり大明小路の延長)、もしくは河川側の論理で架橋位置が決定された可能性がある

6. 今後の課題

今回、錦見七町の分析を主に行ったが、年代ごとの町人地の変遷を分析するとともに、錦見七町以外の町人地の分析も随時行っていく。

7. 参考文献

- 竹林隆夫：「都市構造から見た城下町—岩国城下町の場合—」, 社会科学研究, 1956
- 岩国市史編纂委員会：「岩国市史 通史変二 近世」, 岩国市史, 2001
- 岩国市史編纂委員会：「岩邑年代記(1)~(11)」, 岩国市, 1987-2000
- 岩国市教育委員会：「岩国城下町 岩国市岩国地区伝統建造物群保存対策調査報告書」, 岩国市, 2005

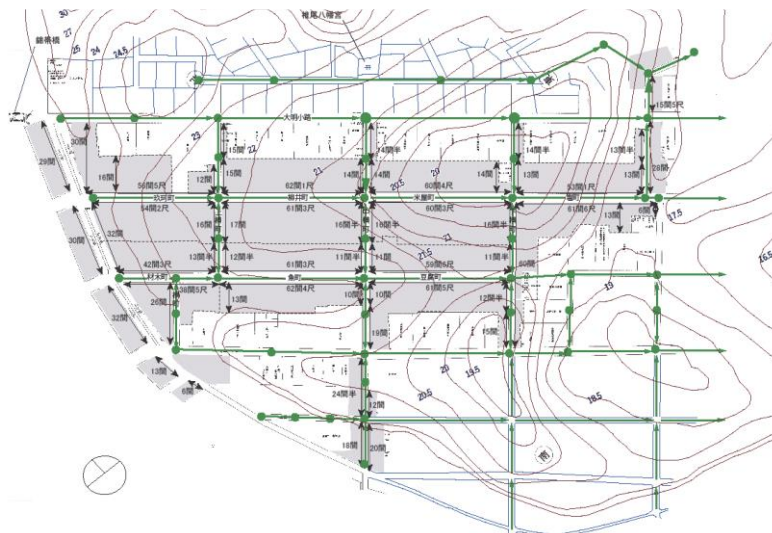


Figure 2. Schema of downtown in the castle town of Nishimi in Iwakuni